



# 首尾一貫感覚とネガティブな切迫性との関連 : 首尾一貫感覚が有する資源動員力を考慮して

雲財, 啓  
齊藤, 誠一  
松木, 太郎

---

## (Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 11(2):163-166

## (Issue Date)

2018-03-30

## (Resource Type)

departmental bulletin paper

## (Version)

Version of Record

## (JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010297>

## (URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010297>



## 首尾一貫感覚とネガティブな切迫性との関連 —首尾一貫感覚が有する資源動員力を考慮して—

### Relationship between Sense of Coherence and negative urgency: in consideration of mobilizing resources power of Sense of Coherence

雲財 啓\* 齊藤 誠一\*\* 松本 太郎\*\*\*

Satoshi UNZAI\* Seiichi SAITO\*\* Taro MATSUKI\*\*\*

**要約：**本研究は、深刻な自己破壊的な行動に繋がるネガティブな切迫性と、健康を増進する要因である首尾一貫感覚との関連について、直接的な関連、首尾一貫感覚によって動員される資源を介しての間接的な関連を明らかにすることを目的とした。首尾一貫感覚が動員する資源としてマインドフルネスを取り上げ、構造方程式モデリングにより分析を行った結果、概ね満足できる適合度を示すモデルを得ることができた。また、ネガティブな切迫性と首尾一貫感覚の関連については、ネガティブな切迫性と首尾一貫感覚の要素の一つである処理可能感の間に直接的な関連、マインドフルネスを介してネガティブな切迫性と処理可能感の間に間接的な関連がそれぞれ示された。本研究の結果は、首尾一貫感覚の要素の特質の違い、首尾一貫感覚が資源の動員力を有することが示唆された。これまでの研究において首尾一貫感覚の要素はひとまとめにされてきたものの、要素ごとに異なる特質があり、動員する資源が異なることが示唆された。

#### 問題と目的

青年期の健康にとって深刻な影響を与えるものとして、近年ネガティブな切迫性 (negative urgency) が注目されている。このネガティブな切迫性は「不快情動を経験した際に(熟慮なしに)衝動的に行動を起こす傾向」と定義されており、特に青年期に高まり、さまざまな自己破壊的な行動との正の関連が示されてきた (Cyders & Smith, 2008; Cyders et al, 2007)。具体的には、攻撃行動 (Miller, Flory, Lynam, & Leukefeld, 2003)、自傷行為 (Glenn & Klonsky, 2010)、過食 (Fischer, Anderson, & Smith, 2004)、喫煙 (Doran, Cook, McChargue, & Spring, 2009)、アルコールや薬物への依存 (Verdejo-García, Bechara, Recknor, & Pérez-García, 2007) などとの関連が顕著といえる。

他方、このようなネガティブな切迫性とは対照的に、健康になる力として首尾一貫感覚 (Sense of Coherence) が挙げられる。首尾一貫感覚は把握可能感 (comprehensibility)、処理可能感 (manageability)、有意味感 (meaningfulness) の3つの要素で構成されるストレス対処の力であり、青年期における健康と正の関連が示されてきた (Antonovsky, 1987 山崎・吉井訳, 2001; 山崎・戸ヶ里・坂野, 2008)。たとえば、首尾一貫感覚の増加が、ストレスの減少 (Carmel & Bernstein, 1990)、ウェルビーイングの増加 (Kaiser, Sattler, Bellack, & Dersin, 1996)、抑うつ減少、援助行動の増加 (Adams, Bezner, Drabbs, Zambarano, & Steinhardt, 2000) と関連していることが明らかにされている。このように首尾一貫感覚は青年期の健康にポジティブな影響を与えるとされてきていることから、ネガティブな切迫性とは拮抗した

関連を示すものと考えられる。

ところで、首尾一貫感覚について十分な検討がなされていない点が2点挙げられる。その一つは首尾一貫感覚が資源の動員力であるという点である。先に述べたように首尾一貫感覚自体と健康の関連は確認され、首尾一貫感覚は個人の内外にある資源を用いることで健康と関連するとされている (Antonovsky, 1987 山崎・吉井訳, 2001)。たとえば、このような内外の資源として、愛着 (岩崎・五十嵐; Sagy & Antonovsky, 2000)、ソーシャルサポート (今林・那須野, 2014; 雲財, 2015)、所得 (高山他, 1999)、学校環境 (Natvig, Hanestad, & Samdal, 2006; 戸ヶ里他, 2009) など様々な水準で検討されてきており、いずれも首尾一貫感覚と関連があることは明らかにされている (Idan, Eriksson, & Al-Yagon, 2016)。しかしながら、これらの検討は関連の記述に留まっており、首尾一貫感覚が実際にこれらの資源を媒介して、どのように健康に寄与するかについては実証的に十分に示されていない。

もう一つは、首尾一貫感覚の3つの要素の特質の違いである。たとえば、藤里・小玉 (2009) は処理可能感が他の2つの要素とは異なりストレス反応を減少させないこと、雲財 (2017) は把握可能感が高いと文章完成法の反応において肯定的反応を減少させることなどを明らかにしており、それぞれ異なる働きをもつことが考えられるが、この点について十分に検討されているとはいえない。

つまり、首尾一貫感覚は健康と関連しているものの、内外の資源をいかに動員し、健康を増進させるのか、首尾一貫感覚を構成

\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

\*\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

\*\*\* 名古屋市立大学大学院医学研究科

(2017年9月30日 受付)  
(2017年10月31日 受理)

する3つの要素がそれぞれどのような機能をもって、健康と関連しているのかについては明らかになっていないとはいえない。

以上のことから、本研究ではネガティブな切迫性と首尾一貫感覚の3つの要素との関連について、動員する資源を考慮した検討を行い、ネガティブな切迫性と首尾一貫感覚の直接的な関連、資源を媒介した間接的な関連を明らかにすることを目的とする。なお、本研究において首尾一貫感覚が動員する資源として、臨床的介入に効果的であると言われているマインドフルネス (mindfulness) を取り上げることとする。マインドフルネスは「現在起こっていることに気づき意識的に注意を向けている状態」として定義され、ウェルビーイングを促進するとされている (Brown & Ryan, 2003)。これに注目した心理臨床場面では、意識的に特定の行動へ注意を向けることの治療効果が認められており (杉浦, 2008; Teasdale et al., 2000), ネガティブな切迫性と負の関連も示されている (Robinson, Ladd, & Anderson, 2014)。

## 方 法

### 1. 調査協力者

近畿地方の総合大学である A 大学に所属する学生および大学院生130名から回答が得られ、記入に不備のあった20名を除いた110名 (男性25名, 女性85名, 平均年齢19.98歳,  $SD=1.86$ ) を分析の対象とした。

### 2. 調査手続き

2017年1月に質問紙調査を実施した。調査は、大学での講義時間を利用して、講義終了後に質問紙を一斉に配布して回収した。

### 3. 倫理的配慮

調査実施にあたっては、事前に調査内容の説明を行い、あわせて調査への協力は自由意思によるものであり、協力しない権利があること、回答の途中であっても中断、撤回、特定項目に対する回答拒否を行う権利があること、またこれらの権利行使によって不利益は生じないこと、プライバシーが保護されることを口頭で説明し、回答された調査用紙の提出をもって同意を得たものとした。

### 4. 調査内容

(a) ネガティブな切迫性 松木・齊藤 (2017) が作成したネガティブな切迫性尺度8項目 (項目例: 「落ち込んでいるとき、気分を晴らすために、後悔するような行動をしてしまうことがよくある」) を使用した。この尺度は「不快情動を経験した際に衝動的に行動を起こす」というネガティブな切迫性の定義 (e.g. Cyders et al., 2007) に適合するように作成された尺度であり、「全くあてはまらない (1点)」から「とてもよくあてはまる (5点)」の5段階評定で回答を求めた。

(b) 首尾一貫感覚 Antonovsky が作成した29項目版 SOC 質問票 (以下 SOC-29 と略) (Antonovsky, 1987 山崎・吉井訳 2001) を使用した。3つの下位尺度である把握可能感11項目 (項目例: 「あなたは、不慣れな状況の中にいると感じ、どうすればよいのかわからないと感じることがありますか?」), 処理可能感10項目 (項目例: 「あなたは、不当な扱いを受けているという気持ちになることがありますか?」), 有意味感8項目 (項目例: 「あなたは、日々の生活で行っていることにほとんど意味がない、と感じ

ることがありますか?」) の合計29項目から構成され、「とてもよくある (1点)」から「まったくない (7点)」の7段階評定で回答を求めた。

(c) マインドフルネス 「今起きていることに対する気づきと注意の程度」を測定する藤野・梶村・野村 (2015) が作成した日本語版 Mindful Attention Awareness Scale (以下 MAAS と略) 15項目 (項目例: 「気づいたら注意を払わず何かしている」) を使用し、「ほとんど全くない (1点)」から「ほとんど常に (6点)」の6段階評定で回答を求めた。

分析には IBM SPSS Statistics 24, IBM SPSS Amos 24を用いた。

## 結 果

### 1. 基礎統計量

各尺度について逆転項目の処理を行った上で、ネガティブな切迫性尺度, MAAS については全項目の平均値, SOC-29については各下位尺度の項目平均値を各変数の得点とした。それぞれの得点範囲, 平均値, 標準偏差, クロンバックの $\alpha$ 係数を算出した (Table 1)。各変数の $\alpha$ 係数は把握可能感を除いて $\alpha=.73$ から $\alpha=.84$ の範囲であり、一定の内の一貫性が確認できた。一方、把握可能感の $\alpha$ 係数は $\alpha=.56$ であり、十分な内の一貫性を示す値ではないものの、先行研究において必ずしも高い内の一貫性が示されてこなかったことから、本研究においてもこの点に留意した上で同様に扱うこととする。

Table 1 各変数の基礎統計量

|           | 得点範囲 | $M$  | $SD$ | $\alpha$ 係数 |
|-----------|------|------|------|-------------|
| ネガティブな切迫性 | 1-5  | 2.74 | .76  | .78         |
| SOC-29    |      |      |      |             |
| 把握可能感     | 1-7  | 3.51 | .55  | .56         |
| 処理可能感     | 1-7  | 4.26 | .73  | .73         |
| 有意味感      | 1-7  | 4.49 | .95  | .84         |
| MAAS      | 1-6  | 3.72 | .66  | .81         |

### 2. 相関分析

ネガティブな切迫性, SOC-29の下位尺度である把握可能感, 処理可能感, 有意味感, MAAS の関連を検討するために、各変数の相関係数を算出した (Table 2)。ネガティブな切迫性においてはSOC-29の3つの下位尺度, MAAS との間に $r=-.23$ から $r=-.54$ の弱いもしくは中程度の負の相関がそれぞれ確認された。また, SOC-29の3つの下位尺度と MAAS との間に $r=.21$ から $r=.34$ の弱い正の相関がそれぞれ確認された。他方, SOC-29の3つの下位尺度間においては、把握可能感と有意味感の間では有意な相関が見られなかったが、把握可能感と処理可能感 ( $r=.47$ ), 処理可能感と有意味感 ( $r=.59$ ) の間ではそれぞれ中程度の正の相関が認められた。

### 3. パス解析

SOC-29の3つの下位尺度がMAASを媒介してネガティブな切迫性へ与える影響を確認するために、相関分析の結果に基づき Figure 1に示すモデルを想定し、構造方程式モデリングによるパス解析を行った。その結果、処理可能感, MAAS からネガティブな切迫性へのパスがそれぞれ有意, 処理可能感から MAAS へのパスが有意傾向であり、把握可能感, 有意味感から MAAS, ネガティブな切迫性へのパスはそれぞれ有意ではなかった。そこ

で、有意ではなかったパスを削除して再度分析を行ったところ、最終的に Figure 2 のモデルが示された。このモデルの適合度指標は概ね満足できる値を示しており ( $\chi^2(5)=6.32$  (n.s.), GFI=.98, AGFI=.93, CFI=.99, RMSEA=.05), 処理可能感, MAAS からネガティブな切迫性への直接的な負の関連 (処理可能感:  $\beta=-.43$ ; MAAS:  $\beta=-.29$ ), 処理可能感から MAAS を媒介したネガティブな切迫性への間接的な負の関連 ( $\beta=-.10$ ) がそれぞれ明らかにされた。

Table 2 各変数の相関

|           | ネガティブな切迫性 | 把握可能感  | 処理可能感  | 有意味感  |
|-----------|-----------|--------|--------|-------|
| ネガティブな切迫性 | -         |        |        |       |
| 把握可能感     | -.31 **   | -      |        |       |
| 処理可能感     | -.54 **   | .47 ** | -      |       |
| 有意味感      | -.23 *    | .13    | .59 ** | -     |
| MAAS      | -.44 **   | .28 ** | .34 ** | .21 * |

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

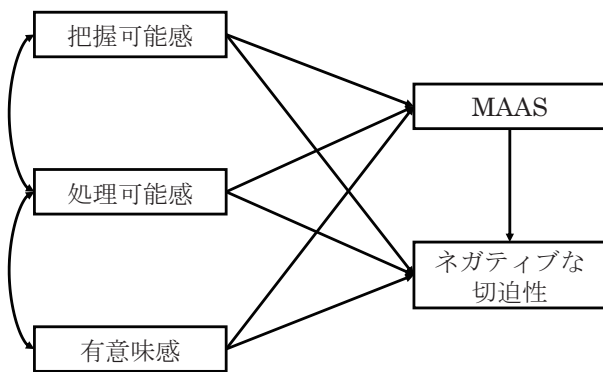


Figure 1 本研究における変数間のモデル  
注) 誤差変数はモデルが煩雑になるため省略した

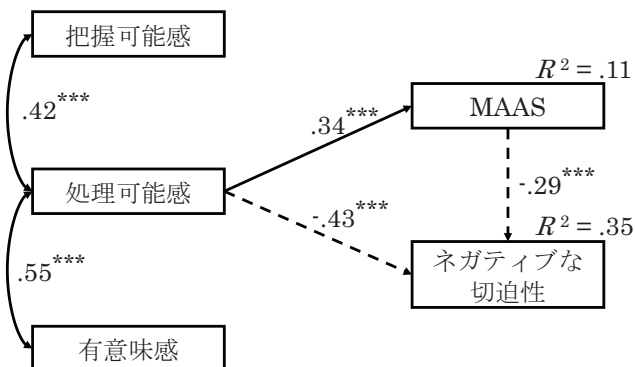


Figure 2 構造方程式モデリングによるパス解析の結果

注1) 誤差変数はモデルが煩雑になるため省略した。

注2) 線に隣接する値は偏回帰係数, 実線は正の関連, 破線は負の関連をそれぞれ示す。

$\chi^2 = 6.32$ ,  $df = 5$ ,  $p = .28$  (n.s.), GFI = .98, AGFI = .93, CFI = .99, RMSEA = .05

\*\*\*  $p < .001$

## 考 察

本研究はネガティブな切迫性と首尾一貫感覚との直接的, 間接的な関連を示すことを目的としてこれらの変数の検討を行ったところ, ネガティブな切迫性が首尾一貫感覚の要素である処理可能感と直接的な負の関連をもつこと, 処理可能感がマインドフルネスを介してネガティブな切迫性と間接的な負の関連をもつことが明らかにされた。このことから以下の二点が示唆された。一つは, 首尾一貫感覚の要素の機能の違いである。すなわち, これまでの研究においては, 首尾一貫感覚が全体として健康に関する様々な要因と関連していること (Adams et al, 2000; Carmel & Bernstein, 1990) が示されていたが, 本研究の結果から首尾一貫感覚の要素のうち処理可能感がマインドフルネスと正の関連を示すことが明らかになった。把握可能感がストレス反応を減少させなかったこと (藤里・小玉, 2009), 要素間の関連が示唆されていること (Antonovsky, 1987 山崎・吉井 2001) などを考慮すると, 首尾一貫感覚として3つの要素をひとまとめにせず, それぞれの要素の特質や機能, 要素間の関連などを考慮していくことが必要であると考えられる。

いま一つは首尾一貫感覚の要素がもつ資源の動員力である。これまでの研究においては, 個人の内外の資源と首尾一貫感覚の関連が示されるに留まっていたが, 本研究では処理可能感がネガティブな切迫性に対してマインドフルネスを媒介して負の関連があることが明らかになった。前述した首尾一貫感覚の要素によって機能が異なることを考慮すれば, 要素が異なれば媒介する資源も変化することが考えられる。したがって, これまでは首尾一貫感覚との関連が示されてきた所得や学校環境なども, 首尾一貫感覚の各要素とどのように関連しているかを明らかにすることは重要であると考えられる。このことは, 介入研究などを行う際にどういった資源を使用するかを決める重要な手がかりを提供することにもなり, さらに研究を進めていく必要があると考えられる。

## 引用文献

- Adams, B. T., Bezner, R. J., Drabbs, E. M., Zambarano, J. R., & Steinhardt, A. M. (2000). Conceptualization and Measurement of the Spiritual and Psychological Dimensions of Wellness in a College Population. *Journal of American College Health*, 48, 165-173.
- Antonovsky, A. (1987). *Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well*. Jossey-Bass Publishers. (アントノフスキー, A. 山崎 喜比古・吉井 清子 (監訳) (2001). 健康の謎を解く——ストレス対処と健康保持のメカニズム—— 有信堂高文社)
- Brown K. W., & Ryan R. M. (2003). The benefits of being present: mindfulness and its role in psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 822-848.
- Carmel, S., & Bernstein, J. (1990). Trait anxiety, sense of coherence and medical school stressors: observations at three stages. *Anxiety Research*, 3, 51-60.
- Cyders, M. A., & Smith, G. T. (2008). Emotion-based dispositions to rash action: positive and negative urgency. *Psychological Bulletin*, 134, 807-828.
- Cyders, M. A., Smith, G. T., Spillane, N. S., Fischer, S., Annus, A. M., & Peterson, C. (2007). Integration of impulsivity and positive mood to predict risk behavior: development and validation of a measure of positive urgency. *Psychological Assessment*, 19, 107-118.
- Doran, N., Cook, J., McChargue, D., & Spring, B. (2009). Impulsivity and cigarette craving: differences across subtypes. *Psychopharmacology*, 207, 365-373.
- Fischer, S., Anderson, K. G., & Smith, G. T. (2004). Coping With Distress by Eating or Drinking: Role of Trait Urgency and Expectancies. *Psychology of Addictive Behaviors*, 18, 269-274
- 藤野 正寛・梶村 昇吾・野村 理朗 (2015). 日本語版 Mindful Attention Awareness Scale の開発および項目反応理論による検討 パーソナリティ研究, 24, 61-76.
- 藤里 紘子・小玉 正博 (2009). 首尾一貫感覚 (Sense of Coherence) とストレス反応, および対処方略との関連 ヒューマン・ケア研究, 10, 23-33.
- Glenn, C. R., & Klonsky, E. D. (2010). A multimethod analysis of impulsivity in nonsuicidal self-injury. *Personality Disorders: Theory, Research, and Treatment*, 1, 67-75.
- Idan, O., Eriksson, M., & Al-Yagon, M. (2016). The salutogenic model: the role of generalized resistance resources. In Mittelmarm, M. B., Sagy, S., Eriksson, M., Bauer, G. F., Pelikan, J.M., Lindström, B., & Espnes, G. A. (Eds.), *The handbook of salutogenesis* (pp.57-69). Switzerland: Springer International Publishing AG.
- 今林 俊一・那須野 美咲 (2014). 大学生の首尾一貫感覚に関する研究 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 23, 143-149.
- 岩崎 真和・五十嵐 透子 (2011). 大学生における sense of coherence とアタッチメント・スタイルおよび知覚されたソーシャル・サポートの関連 教育実践学論集 (兵庫教育大学大学院連合教育学研究科紀要), 12, 71-81.
- Kaiser, F. C., Sattler, N. D., Bellack, R. D., & Dersin, J. (1996). A conservation of resources approach to a natural disaster: sense of coherence and psychological distress. *Journal of Social Behavior & Personality*, 11, 459-476.
- 松本 太郎・齊藤 誠一 (2017). ネガティブな切迫性および刺激欲求が青年の自己破壊行動欲求に及ぼす影響 青年心理学研究, 29, 17-28.
- Miller, J., Flory, K., Lynam, D., & Leukefeld, C. (2003). A test of the four-factor model of impulsivity-related traits. *Personality and Individual Differences*, 34, 1403-1418.
- Natvig, G. K., Hanestad, B. R., & Samdal, O. (2006). The role of the student: salutogenic or pathogenic? *International Journal of Nursing Practice*, 24, 73-89.
- Robinson, J. M., Ladd, B. O., & Anderson, K. G. (2014). When you see it, let it be: Urgency, mindfulness and adolescent substance use. *Addictive Behaviors*, 39, 1038-041
- Sagy, S., & Antonovsky, H. (2000). The development of the sense of coherence: a retrospective study of early life experiences in the family. *The International Journal of Aging and Human Development*, 51, 155-166.
- 杉浦 義典 (2008). マインドフルネスにみる情動制御と心理的治療の研究の新しい方向性 感情心理学研究, 16, 167-177.
- Teasdale, J. D., Segal, Z. V., Williams, J. M. G., Ridgeway, V. A., Soulsby, J. M., & Lau, M. A. (2000). Prevention of relapse/recurrence in major depression by mindfulness-based cognitive therapy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 68, 615-623.
- 高山 智子・浅野 祐子・山崎 喜比古・吉井 清子・長阪 由利子・深田 順…関 由紀子 (1999). ストレスフルな生活出来事が首尾一貫感覚 (Sense of Coherence: SOC) と精神健康に及ぼす影響 日本公衆衛生雑誌, 46, 965-976.
- 戸ヶ里 泰典・小手森 麗華・山崎 喜比古・佐藤 みほ・米倉 祐貴・熊田 奈緒子・櫛原 (関) 圭子 (2009). 高校生における Sense of Coherence (SOC) の関連要因の検討 日本健康教育学会誌, 17, 71-86.
- 雲財 啓 (2017). Sense of Coherence の因子に注目した文章完成法の反応の検討, 神戸大学発達・臨床心理学研究, 16, 19-22.
- 雲財 啓 (2015). 大学生の sense of coherence の3要素とソーシャルサポートの関連, 日本青年心理学会第23回発表論文集, 40-41.
- Verdejo-García, A., Bechara, A., Recknor, E. C., & Pérez-García, M. (2007). Negative emotion-driven impulsivity predicts substance dependence problems. *Drug and Alcohol Dependence*, 91, 213-219.
- 山崎 喜比古・戸ヶ里 泰典・坂野 純子 (編) (2008). ストレス対処能力 SOC 有信堂高文社